

日本語使用に関する低次段階のリフレクション記録を支援する対話型システム「REFLECTION-BOT」の設計と実装

甲斐 晶子*, 松葉 龍一*, 合田 美子*, 和田 卓人**, 鈴木 克明*

Design and Implementation of a Supporting System for Encouraging Low-Level Reflection with Interactive Recording in Japanese Using Experiences

Akiko KAI*, Ryuichi MATSUBA*, Yoshiko GODA*, Takuto WADA**, Katsuaki SUZUKI*

1. 序

1.1 研究の背景と目的

国内の留学生などの日本語学習を要する学生(以降、留学生)は増加の一途を辿り、ニーズ、背景、学習観や入学時の日本語運用能力も多様化している。初年次必修の日本語科目のような一斉授業だけではケアが十分ではなく、各自が授業外にも必要な学習を自律的に進めていく姿勢が一層求められる。近年では、教員と相談しながら目標を設定し、学習方法を検討し、実践したのちに評価するという自律学習支援の実践報告が増加しつつある⁽¹⁾。自律的な言語学習ではオレックが提唱する学習者オートノミーモデル⁽²⁾に代表されるように、学習目標の設定には学習者自身が責任を持つ。自らが認識するニーズと関心に基づいた学習目標を設定することが期待されるが、得てして「日本語能力試験合格」や「ペラペラになりたい」など、資格取得や漠然とした希望を目標としがちである。それでは身近な活用場面が想起しにくいゆえに段階的な成長実感も期待できず、学習意欲の維持が困難になるおそれがある。その場合、教員などによる介入の必要が生じる。

そこでよく用いられる介入は個別セッション⁽¹⁾とも

呼ばれる対話による介入である。学生と一対一で学習方法や学習状況、日本語使用状況について聞き出し、真の課題や問題点を共に探っていくというものである。この種の思考深化を促す介入にはリフレクション研究における支援手法が応用できよう。The 4Rs Model of Reflective Thinking (4Rs モデル)⁽³⁾のレベル分け(低次から Reporting, Relating, Reasoning, Reconstructing の4段階が提案されている)に代表されるように、リフレクションには深度がある。個々の出来事の記録をもとに経験や既有知識と関連づけ、なぜその結果が生じたか自分なりに理由づけ、知識を再構築していくという段階を経ることで思考は深化していくとされている。より高次のリフレクションを促すには質問・対話が有効とされており、質問例が複数提案されている^{(4)~(6)}。自律学習においては、特に学習目標の設定時に支援が必要とされ⁽⁷⁾、教員は経験的にたとえば日本語に囲まれて生活している利点を活かし、日常生活のあらゆる活動を日本語学習の機会と捉え、生活のなかで見聞きしたこと、やりとりしたことを振り返り、そのなかで必要性を感じたことや気づいたことから目標を引き出すように指導している。

ただ、教員には個々の学習者との十分な対話時間の確保が困難な実情がある。自律的な学習支援において

* 熊本大学教授システム学研究センター (Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University)

** タワーズ・クエスト株式会社 (Towers Quest Inc.)

受付日: 2019年11月26日; 再受付日: 2020年3月4日; 採録日: 2020年5月8日